いたちかわらばん

通刊５３号　　鼬川・独川 / 河原番・瓦　　'11 春号

【版画　宗森英夫】　　【学校橋】

学校橋

いたち川右支流の下流から二番目の橋として『学校橋』という軽自動車がやっと通れる小さな橋があります。県立柏陽高校グラウンド脇を通って天神橋へ抜ける道に架かる橋で、柏陽高校ができる以前からある古い橋です。

橋名の由来は、旧本郷村（一九三九年横浜市に編入）の本郷小学校（現柏陽団地）への通学路に架かっていた橋だったからです。当時は村で唯一の小学校ですから、村の大半の子どもたちが、この橋を渡って学校へ通ったのです。現在、本郷小学校は環状四号線（原宿・六浦線）に沿った位置に移転していますが、一九六〇年に旧校舎が解体撤去されるまで、明治二五年以来六十八年間、現柏陽団地の場所にありました。

昔、いたち川の本流は、この学校橋のすぐ下流で右支流（猿田川）と合流しており、現在、和田医院の駐車場になっている所を流れておりました。（『いたちかわらばん』通巻六号にその頃の様子が詳しく紹介されています）

春には、この『学校橋』付近から警察学校前あたりまで続く桜並木が咲きそろい大勢の市民が花見を楽しみます。いたち川プロムナードが最も華やぐ季節です。

昔、いたち川が汚れドブ川のようになり、ボウフラが大発生し、周辺の人たちが蚊になやまされることがあり、その対策として和田医院の当時の院長が鯉を放流したのが、いたち川に養殖鯉が増えたはじまりだそうです。

（いもり）

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です

「いたちかわらばん」５０号発刊記念 原画展　開催

「えー、これ全部一人で彫ったの？すごーい！」リリス２階のギャラリーＡから驚きの声が聞こえてきた。１月５日から 10 日までの会期中、約３５０名が厳寒の時季にも拘らず来場し、壁面に並んだ２色刷りの版画に顔を近づけて見入っていた。「いたちかわらばん」５０号発刊を記念して、毎号の１面半分を飾って人気があるいたち川ＯＴＡＳＵＫＥ隊　隊長宗森英夫の版画の原画５０枚を額入りで展示した原画展は、発刊以来１２年、最新の５２号（２０１１年冬号）までの全号と共に会場いっぱいに生花の彩りを添えて飾られていた。

いたち川を多角的に捉え、多様な角度から紹介する内容は「いたち川百科全書」のように読む人にいたち川のいろいろな姿を浮かび上がらせている。こどもから大人まで出来るだけ広く一般の方々に理解し興味をもっていただくために、編集や表現を工夫している。自然の持つ奥深さに関心をもってもらい、今後も永く自然を友として心豊にと願って活動を続ける隊員たちの説明に、「いつも見慣れた風景も、こうして見ると違って見える」「こんなところもあるなんて知らなかった、今度行ってみたい」「１枚の版が２枚の版木によって刷られているとは知らなかった」「この手拭いの図柄がいいわね」「どこからスケッチしたかが判って行きたい場所がすぐわかるね」といろいろな感想が聞こえてきた。

（うぐいす）

「いたち川知り隊」活動報告 （２０１０年度　冬の部）

いたち川に暮す鳥を観察する催しが２月 26 日（土）に天神橋から水神橋の間で行われました。参加者は小学生１７名と保護者２６名です。

集合場所の栄区役所新館１階で受付を済ませ、いたち川 OTASUKE 隊の宗森隊長の挨拶の後２班に別れ区役所裏の階段を下りたところから観察が始まりました。先ずは階段脇の桜の木にヒヨドリ、大いたち橋の下にはカルガモが居ました。ここから左岸を天神橋に向かって進みます。天神橋を渡り右岸に出て水神橋に向かって進みます。天神橋を渡ったところではハクセキレイ、街路樹にはシジュウカラを見つけました。昨年は大いたち橋、小いたち橋のたもとでカワセミを見つけることができたのですが今年は居ませんでした。　城山橋に向かって進む。水面ではコガモがお尻を上にして餌を採っています。上空にはトビ、城山橋から警察学校橋の間はいつも鳥の少ない場所ですがメジロ、スズメ、ムクドリなどを観察します。アオジも居ました。警察学校橋から海里橋の間ではコサギです。　海里橋を過ぎ花の木橋までの間でやっとカワセミを見ることができました。花の木橋から新橋の間、西本郷中学校の端で本日最大の珍鳥マヒワです。今年はマヒワの当たり年ですが、いたち川で見ることが出来ようとは驚きました。新橋で左岸に渡り笠間の町内会館でトイレ休憩です。本来ならば右岸に戻り水神橋に向かうところですが、一斑はこのまま左岸を笠間町公園に向かいます。町内会館と公園の間の芝生でツグミです。笠間町公園でチョッと早いのですが鳥合わせを行いました。最後に今日見た鳥の鳴き声を「声の聞こえる野鳥図鑑」と U-SPEAK を使い勉強しました。二班はトイレ休憩も取らずに新橋から水神橋に向かい笠間町公園に集結です。同じように鳥合わせ、鳴き声の勉強の後解散しました。

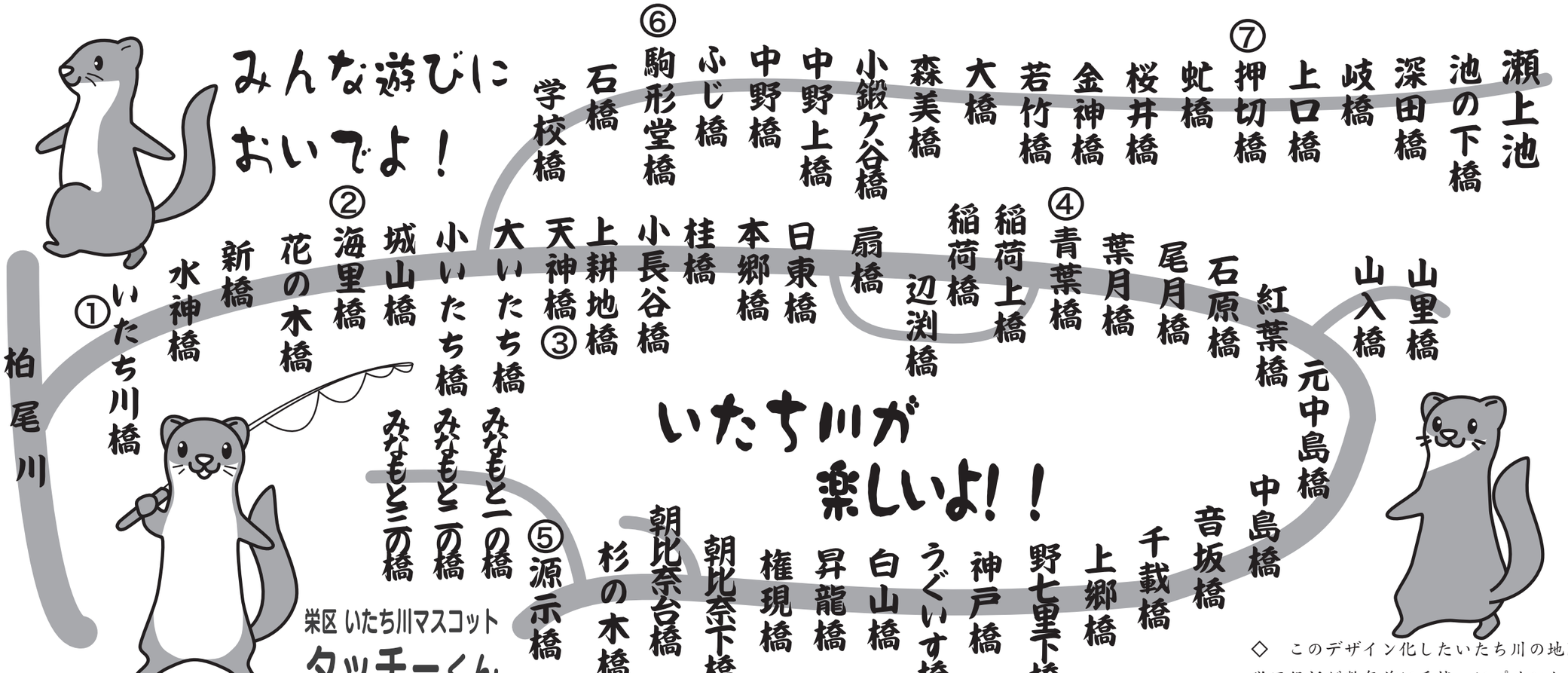
当日見聞きした鳥は以下のとおり。

カワウ、コサギ、コガモ、オナガガモ、カルガモ、トビ、カワセミ、ハクセキレイ、キセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ムクドリ、ハシブトガラス、スズメの１９種

（日本野鳥の会　神奈川　手島英次郎）

発行年月 2011年3月
通刊53号

発行：独川 OTASUKE隊　（いたちがわおたすけたい）
OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係　〒247 - 0005　横浜市栄区桂町303 -19
TEL 045 - 894 - 8161　FAX 045 - 895 -2260
栄土木事務所下水道・公園係　〒247 - 0007　横浜市栄区小菅ケ谷 1- 6 -1
TEL 045 - 895 - 14 11　FAX 045 - 895 -1421
（お便り・お問い合わせは こちらまで）



◇　このデザイン化したいたち川の地図は、栄区役所が数年前に手拭いにプリントした時の原画を利用したものです　◇

【いたち川の橋】

いたち川本川に架かる橋の数は、図中では４１示されていますが、その他に専用橋が２橋あります。最下流にある工場へ入る橋と警察学校に入る橋です。橋は河川工事や道路建設の関係で無くなったり新設されたり絶えず変化しています。上図の橋でも現在暗渠化して機能してない橋は、杉の木橋、朝比奈台橋、朝比奈下橋で、これからの工事でなくなるであろうと思われる橋は神戸橋、野七里下橋、上郷橋です。新しく出来ている橋は上郷地区センターに入る、ほたる橋、新上郷橋です。橋の数としては 37 橋になり専用橋を入れても３９橋になると思われます。

【昔（江戸時代）あった橋】

橋は時代により数が増えてきましたが、明治初期に新政府は各地方にある橋の数を報告させています。「神奈川県皇国地誌・相模国鎌倉郡村誌」によると、本川には新橋・天神橋・稲荷橋・坊中橋・前橋・関川橋・和田橋・中島橋・神戸橋の８橋、官費で維持管理していたものは新橋だけで、他の橋は民費と記されています。右支川（猿田川）に架かる橋は、茶道橋・駒形堂橋・大橋・金神橋・桜井橋・押切橋・東の前橋の７橋が記されています。茶道橋が石造りで他の橋は全て木橋と書かれていますので現在の本郷石橋ではないかと思われます。

【橋の名前の由来】

橋の名前は、川の名前やその地域の字名などを付けている場合が多く見られます。いたち川はそれ以外に、住宅開発した企業の名前や情景から付けられた名前、製作した樹木の名前であったり、不動産業者が土地の付加価値を高めるために付けたと思われる名前などいろいろです。

① いたち川橋　河川改修工事を行った際に出来た橋で、丸太何本かで作られ、農家の人が田んぼに渡る橋で地元では「田立橋」（たりゅうばし）と呼んでいたそうですが、現在の橋が出来たときに県道原六線の跨道橋の名前が「田立橋」であったので「いたち川橋」の名前を付けたと言われています。

② 海里橋　この橋は、明治時代の地図にはなく、この地域は日本軍の海軍工廠の周辺道路に位置していました。この名前の由来には、いろいろな説がありますが、１）出立川（いたち川）に関連して帰り橋が転訛した説・・・しかし、古くは橋の形跡がないことから怪しい。２）海から１海里ほどのに位置にあることからという説もありますが、海までは直線でも３海里以上はあります。３）この橋は昭和に入ってから付けられたことから海軍工廠と里を結ぶ橋を意味するよう名づけられたのではないか等いろいろな説がありますが真実はわかりません。（注：１海里は 1852m)

③ 天神橋　現在の天神橋は軍用道路（県道原六線）として整備した際にできた橋で、旧道は東側を通り左支川（洗い沢川）に架かる「大下橋」を渡って金沢方向に行き、現在の「上耕地橋」が「天神橋」であったと言われています。それでは天神様は何処にあったのか、現在の公田交差点の位置にあり軍用道路工事で無くなったようです。

④ 青葉橋　証菩提寺に入る橋で「坊中橋」の名前であったのが奥地の住宅地の開発した際に分譲地の販売し易い様な近代的な名前に変えられたのではないかと思われます。

⑤ 源示橋・みなもと一の橋・二の橋・三の橋

この橋の名前は、前は源橋→檜橋→源示橋となり、弁慶一の橋・二の橋・三の橋→みなもと一の橋・二の橋・三の橋と名前が変わっています。元々の名前は都会の人に奥鎌倉の高級分譲地として名前を付けたと言われています。その時のチラシには、川の名前は「しずか川」と書かれていたのを住民に見せてもらった時は大変驚きました。

【右支川の橋】　⑥ 駒形堂橋 この橋を渡って少し登った所に駒の形をしたお堂があったがことから付いたと言われています。現在は川が暗渠化されたために無くなっています。

⑦ 押切橋　右支川（猿田川）を昔は上川、いたち川本川を下川と呼ばれその間を石原（字名）と呼んでいました、その高低差は大人の背丈以上あったと云われています、増水する度に上川の堤防が水で押し切られることから付いた名前であると言われています。　（みじんこ）